

---

# 剣の王子と亡国の傀儡姫

kujiraking

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

剣の王子と亡国の傀儡姫

### 【Zコード】

Z9965Z

### 【作者名】

kuji raking

### 【あらすじ】

家族の裏切りに遭い、祖国を後にした王子。臣下の裏切りに遭い、祖国を追われた王女。

王子は自分のパートナーを探すため、王女は祖国の平和を取り戻すため、大陸に巻き起こる戦争の中を駆け巡る！そんな感じの物語を目指したいと思います。

タイトルはまだ変えるかもしれません

「退却！ 退却一つ！」

指揮官の叫び声が戦場に放たれる。

しかし、次の瞬間、彼の首は鮮血の糸を引きながら戦場を舞う。全てはもう遅かった。

エウステイア王国とガズール帝国の国境線近くで始まった戦闘。エウステイア王国の内政の乱れにつけこんで侵略を始めてきたガズール帝国に対し、王国軍は当初こそ優勢だったが、時を追うごとにその戦線は後退。

今ではエウステイア南部に広がる、ミドレグリア平原にまで押されていた。

王国は正規兵の消耗を恐れ、学生隊を投入する。

この時のために召集されていた王立軍事学校の学生兵たちであった。しかし、練度の高い帝国兵に、予備軍人扱いの学生たちが敵うはずもなく、王国は敗北に敗北を重ねることになる。

## 救出、そしてはじまり

ひどい戦場だつた。

王国兵1000に対して帝国兵500。数字だけで判断するならば、普通に考えて負けるはずはなかつた。しかし、今や戦場で立つてゐるのはそのほとんどが帝国兵だらう。王国兵たちはもはや命惜しさに逃げ去つて行くが、ここを死地として必死の抵抗を試みるかのどちらかしかなかつた。

カイルは王国兵としてこの戦場にいた。

彼の、高貴さを思わせるような整つた顔にはすでに赤黒い返り血がべつとりと付いており、両手に構えた剣を振りぬく度に、その赤はいつそう濃くなつてゆく。

「なつ、なんだコイツッ！」

彼に対峙する帝国兵たちは、彼の姿に本能で恐怖を抱いていた。

そして彼らの身体の怯んだ隙をカイルは見逃さない。

右手のひと薙ぎで一人の首を飛ばし、続く左手の刃でもう一人の腹を切り裂く。

もはや近づく者を切り捨てるだけのカイルの通る道筋には、帝国兵の死体が列を成すように倒れている。

しかし、彼一人がいくら敵兵を倒したところで、王国軍の敗北は確実。

普通ならばこの場は退却するところだが、カイルにはやらなければならぬことがあつた。

「レーミア！ ロドリス！ どこだ、どこにいるー！」

カイルは大声を張り上げて友の名を呼ぶ。

彼らを助けないことには、カイルはこの戦場を離れるわけにはいかなかつた。

叫びながらも敵兵を切り倒しつつ、しばらく進むと王国兵らしき集団が見えてきた。

帝国兵に囲まれながらも、10人程が固まつて、敵を牽制しながら退却を試みている。

しかし、彼らが全滅するのはもう時間の問題だろう。あの中に友人たちがいるとは限らない。しかし、見捨てていけるほどカイルは冷酷ではなかつた。

カイルは敵兵の間を縫うように走つたが、彼が近づくまでに、ひとり、また一人と、帝国兵の剣によつて打ち倒されていく。

「カイルっ！！」

剣の打ち合わせられる金属音や男たちの野太い声の響く戦場に、するがるような少女の声が響く。

聞き覚えのある声に名前を呼ばれたカイルは、目を凝らし、集団の中に声の主の姿を探す。

「レーミア！ そこにいるのかつ！」

カイルがやつと王国兵集団の元にたどり着いた頃には、すでに3人にまで数が減つていた。

その内の一人はレーミア。カイルが探していた人物で、先ほどの声の主であつた。

「レーミア、無事かつ」

残つていたのはレーミア、そしてこちらもカイルの友人のロドリス、そしてもう一人は見たことはあるような気がするが名前を知らない少女。

「カイル、無事だつたんですね」

涙目で返事を詰ませたレーミアに代わり、友の生存を喜ぶロドリスの声に、カイルは頷きだけを返す。

3人とも見たところ、多少の傷を負つてはいるが、行動に支障のあら者はいないようだつた。

「ここはもうだめだ、退くぞ

近づく敵兵の剣を身を翻して躰かわし、左右の剣で切り捨てながら、カイルは背後の森に向けて駆け出した。

群がる帝国兵の中を、カイルを先頭にした4人が突つ切つていく。

幸い、そこまで遠い距離ではなかつたので、カイルは後ろを気にしながらも、すぐに辿り着くことが出来た。

（帝国兵は人數が多い。森にさえ逃げ込めば、追撃は無いだろう）  
そう考へての咄嗟の行動だつたがカイルの考へは見事に当たつて、森に入りこんでしばらく行くと

敵兵が追いかけてくる気配はなくなつた。

念には念を入れてそれからもうしばらく歩き続けて、空が暗くなつてきた頃、カイルたちは座り込み、身体を休めることにした。

「カイル、よく無事でしたね」

「休みして、全員の呼吸が落ち着いてきた頃、ロドリスがカイルへと話しかけた。

「ああ、お前らこそ。生きていてくれてよかつたよ」

カイルは頬に付いた血をぬぐいながら自分の正直な気持ちを伝えた。正直、この程度のことでカイルは自分の死の予感すら感じることはなかつたが、もし彼らが生きていなかつたら自分が遠路はるばる、このエウステイア王国まで来た意味がなくなつてしまつ。

「でもみんな、死んじやつたね」

レーミアが暗く沈んだ表情を浮かべる。その言葉に、カイルを除く3人の表情も、一斉に悲しみを湛えたものになる。

あの場所で、帝国兵と刃を交えたカイルたち王国兵は、学生から成る部隊であつた。

王立軍事学校。

エウステイア王国が大陸に誇る、軍人の養成学校だ。

毎年多くの士官候補生を輩出しており、有事の際には実働部隊も派遣する、王国軍直轄の教育機関である。

カイルたちはこここの5年生であり、戦場には5、6年生の混合部隊が送り出されていた。

「あの、ちょっとといいかな」

今まで、カイルは自分に話しかけてきた彼女　　名前を知らない少女の存在を忘れていた。

カイルは視線だけを彼女に向けて言葉の続きを待つ。長い黒髪に、しなやかな体躯を持つその少女は、カイルの視線につゝ、と詰まりながらもすぐに先を続ける。

「助けてもらったことに感謝する。私はエリ・シノサキ。6年生だ」「知つてますよー。シノサキ先輩。6年生の剣術成績の主席。将軍席に最も近い人つて噂の人です」

ロドリスは「会えて嬉しいです！」と言いながら彼女に握手を求めている。

「へえ。そんなにすごいのか」

カイルは驚いてみせるが実際は全く驚いてはいなかつた。軍事学校の卒業生で在学6年間を通しての成績上位者は、若いうちから軍の上層部に迎えられることもある。

座学や剣術の成績を総合的に判断し、かつ人間的にも優れていると認められれば、国内に12人しかいない将軍職にでも選ばれる可能性はある（しかし実際、卒業後すぐに将軍になつた者はいない）。しかし、カイルにはそんな外野からの評価は興味の内に入らなかつた。

実を言うと、先ほどの撤退時、カイルはこの少女を試していた。

撤退において、最も危険なのは後ろを守る「殿」であるが、包囲されていていたときの彼女の鮮やかな剣裁きを見ていたカイルは彼女をそこに置くことで、力を計ることにした。

レーミアやロドリスは同じ学年だから力の程を把握してはいるが、彼女ことを知らないカイルは、一緒に行動することになるであろうこの少女の力量を確かめておく必要があつた。

カイルが後ろを必要以上に気にしていたのはそのためであつたが、果たして、この少女はカイルの期待以上のはたらきを見せてくれたのであって、自分の中では彼女への評価はすでに決まつたものだつたのである。

「いや、私なんてまだまだ修行の身だよ。それよりキリ……」「カイルです」

「カイル君か。カイル君は強いな。先ほどの剣捌き、実に美しいものだったよ」

「……」

カイルとしてはわずかとはいえ、自分の実力を見せるのは躊躇われた。

しかし、カイルがエウステイア王国へ来た理由。

その理由のためにはレー・ミア達を死なせるわけにはいかなかつたのだ。

カイルは5年前、この国に来た頃のことを思い出す。

## 回想 ハウステイア王城にて

「レストニア王国第一王子、カイル・フェリル・レストニアであります」

玉座の間と呼ばれる場所で、カイルと名乗った少年は目の前に座るこの国の女王、メクフィリア・ルフェス・ハウステイアに向かい、片膝を地につけ、頭を垂れている。

「顔をあげてください、カイル王子。そんなに畏まらなくてもよいのですよ」

「はっ」

カイルは床に向けていた顔をあげる。

メクフィリア女王は、とても美しい女性ひとだった。

線の細く、透き通るような肌をした身体はしかし、妖艶さも漂わせて、豊かな胸元を惜しげもなく晒した大胆な衣装が彼女の清らかさを一層のものとしているようである。

並の男性ならば、その姿に劣情を抱いてもおかしくないほどであるが、カイルはまだ12歳。

女慣れなど当然まだしていないのであって、ただただ羞恥ずかしいだけであった。

「この度は、私の勝手な願いを聞き入れてくださいって、ありがとうございます」

カイルは、美しき女王から視線をはずしながら、必死で覚えてきたセリフを囁つ。

目上の人に対する畏まつた言葉遣いはカイルにとって数少ない、苦手な分野だった。

今回、カイルはレストニア王国を出て、ここハウステイア王国にある王立軍事学校へ通うことになつて、初めて他国の王族と直接会話するために、一夜漬けで何通りものセリフを覚えてきたのだ。

「いえいえ。あなたのお母上とわたくしは文を交し合つほど仲で

すもの。彼女の愛する息子のことであれば協力は惜しみませんわ」  
カイルの母、レストニア王妃は元々エウステイア出身の平民だったらしい。たまたまこの地を訪れた父、レストニア国王がたまたま母を見つけ、人目惚れして連れ帰つて王妃にしたのだそうだ。

昔からレストニアは出身や身分などの違いにこだわる国ではなく、色々な国から優秀な人材を受け入れ、発展してきた国だ。

レストニアという国も元々は移民の建国した国であり、その当時の彼らは大陸各地から集まつていたという。

だから、レストニアの民も王の結婚には反対する者などいなかつた（さすがに上層部の貴族たちは王族に平民を迎えるなんて、と言つていたらしい）。

それから一言二言交わした後、女王との謁見は終わり、カイルは食事の席に招かれた。

女王やその夫、一人娘であるアイリス王女の居並ぶ席に座るのはとても度胸のいることだつたが、カイルはもうどうにでもなれという気持ちで、この誘いを受けた。

しかし、カイルの緊張は杞憂だったようで、カイルはまるで彼女らの本当の息子のように、打ち砕けた態度で接してくれた。  
そして、その食事の席も終わり、もう部屋に戻ろうかというとき、カイルは女王に呼び止められた。

「なんでしょうか、メクフイリアさま」

カイルも、もうずいぶん彼女との会話には慣れてきた。  
変に気を使わないでいいのはありがたかった。

故に彼はこの女王との会話を楽しいものだと思いかけていた。  
しかし、

「あなたの真の目的は聞きました

続く彼女の言葉にカイルは戦慄を覚えた。さすがの人生経験の違いか、それとも彼女はカイルの瞳の奥に何かを見たのだろうか。

「ですがどうか、くれぐれも無理をしないで。何かあれば必ず力を貸すから」

カイルは僅かに顎を縦に引いてから、彼女に背を向けて歩き出した。

そう、メクフィリアの察した通り、カイルには目的があった。表向きは見識を広めるため、と言っているが、本当はそうではなかった。

彼は自分が生き残るために、自分の助けとなる信頼できる人物を探しにきたのだ。

王立軍事学園に入れば、自分を支えてくれるほどの、強い者、信頼のおける者と出会える確立は高いだろうから。

彼は、レストニアで自分の母が自分の兄に殺されるところを見てしまった。

身内と言えども、もう誰も信頼できない……。

「カイル君、カイル君。大丈夫か？」

「あっ、ああ。すまん、何でもない」

昔を思い出しているうちに、ぼうっとしてしまったのか、エリ・シノサキが心配そうにこちらを覗き込んでいる。

「大丈夫。それより、何の話でしたつけ？」

「キミの剣技の話だよ。あれは我流かい？」

「ええ、まあ。剣術は兄に教わりましたが、二刀使いは完全に我流です」

カイルはその戦闘スタイルを最大限に活かすため、二刀流を好んでいる。

敵の刃とは、よほどのことがない限り切り結ばず、全て避ける。カイルの並外れた身体能力があればこそその荒業ではあるが、これにあわせて二刀を使うことによって、極限まで手数を増やすことが出来るのだ。

「東方にも二刀流というものはあつたが、長剣一本といつのはあまり聞かないなあ」

「そうでしょうね。慣れていなければやりにくいけだけですよ」

「シノサキ先輩は東方の出身なんですか？」

カイルとエリの会話に「わたしレーミアつていいます！」と言いながらレーミアが入ってきた。

「あっ、ああ。そうなんだ。あと私のことはエリで構わないよ」

若干うるたえた声で返答するエリ・シノサキ。

カイルは彼女の特徴的な名前で気付いていたが、レーミアはわかっていないなかつたらしい。

そして彼女のこの慌て様。何か事情がありそうだな。

「私はヤマトの国の出身だ。まあそんな国はもう存在しないがね」

ヤマトの国とは、10年ほど前エウステイア王国に併合された小国

であった。

かの国のフジという山でかつて採れていた特殊な鉱石は、鉄をも切り裂く武器を造り出せたという。

「そうですか。あつ、そんなことよりお腹すきません？ 今日はもう暗いですし、どうせここで野宿になりそうですし」

「そうだね。僕は近くに水場が無いか探してくるよ」

レーミアとロドリスがまたも暗くなりかけた雰囲気を、無理矢理元に戻す。

この2人がいてくれると、ほんとにぎやかになるなあ、とカイルは思った。

すると、立ち上がったロドリスがカイルの方へと歩いてきた。

「カイル、あれを使つても大丈夫かな？」

「ああ、いいんじやないか」

ロドリスは植物の声を聞き取ることができる特殊な能力を持つている。

学校の寮で同室だったカイルは、この秘密を打ち明けられた時、誰にも言わないほうがいい、と忠告しておいたのだった。

そんな能力を持つと明らかになれば、卒業を待たずして、ロドリスは軍に道具同然に扱われることになるだろう。

それに、カイルには、卒業後も彼を軍には渡さず、自分の側へと引き込むつもりであった。

ロドリスは頷いて森の方へ歩いていく。

カイルは気をつけろよー、とだけ言つて、エリ・シノサキに向きなある。

「それで、先輩。これからの方針なんですが……」

「エリ、と呼んでくれと言つたろう。で、どうする？」

「……はい。俺たちが戦つっていたミドレグリア平原はもう敵の占領下でしそう。幸い村などはもう少し奥、タウラク付近まで入り込みないと無いでしそうし、夜になれば敵はそこに陣を張ると思います」

「ああ、そうだろうな」

カイルは地面に、指で地図を書きながら説明をする。

「俺たちがいるのは」「」「ミドレグリア大森林です。平原を通らずにハウスティアへと戻るのは山地を越えなければダメです。俺は一旦、ラプタ商国に抜けてから、エウスティアへと戻るのがいいと思います」

ミドレグリア平原からその北にある大森林へと指で線を引き、さらにはその北西にあるラプタ商国を示す。

「ふむ、しかし少し遠くはないか？」

「」「の戦力で5000の帝国兵の中は突っ切れませんよ。それよりもラプタとの間には街道が繋がっていますから」

「それもそうか。ではいつ出発する？ 暗いうちに行ける所まで行つたほうがいいのではないか？」

「いえ、森の中ですしそここまで警戒する必要もないでしょう。レーミアたちも疲れているでしょうし出発は夜が明けてからでもいいかと」

「わかった。ではその線で」「」

「はい」

カイルは了解の意を示した後、今の今までなかなか言い出せなかつたことを切り出す。

「さつきから年上に向かつて失礼な言葉遣いですいません。それに本当だつたら先輩の指示なりを聞くべきところなのに」

しかしそんなカイルの心配をエリは一笑に付した。

「いやいや、優れた意見を聞き入れるのは当然だよ。ましてやキミは私よりも頭が回る方みたいだからね」

「はあ、ありがとうございます」

それからカイルは、水を持つて戻ってきたロドリスや、糧食の配分をするレーミアにも夜が明けてからの予定進路を伝えた。

そして王国軍から支給されていた携行食の干しパンと、力チカチの干し肉を食べた後、念のため周囲の気配に気を研ぎ澄ませながら、浅い眠りに落ちていった。

## 回想 学園寮談話室にて

「これは、マズいなあ」

王立軍事学校の学園寮談話室。

そこに置いてある、国内の近況情報を綴つてある広報紙に、カイルは難しい表情を浮かべる。

彼の視線の先には【メクフイリア女王が病死】と書かれた文書があった。

最初に会った頃には病気にかかっている様子は見えなかつたから、患つたのは最近のことなのだろう。

まさかあの人気が死んでしまうとは思つていなかつた。

当然その場合の身の振り方も考えてはいない。

彼女の後ろ盾があつたからこそカイルは安心してこの学校に通えているが、やはりいつでも抜け出せる準備をしておいた方がいいかもしれない。

「なにしてるの？」カイル

「うおおつ」

カイルが座る椅子の背もたれ越しに、レーミアの顔がひょいつと現れた。

「お前、いきなり……」

いつも自分に向けられる視線や気配には人一倍敏感なカイルでさえ、いつも彼女の接近には気づくことが出来ない。

彼女はそれほどまでに、己の気配を殺す術を体得しているのである（本人に自覚は無いらしい）。

「そんなもの読んでるのはカイルだけだよ。面白いの？ それ

「ああ、これな。まあ面白いか面白くないかと言われば面白い……かな？」

実際レーミアの言つ通り、談話室に置いてあるこの広報紙を読んでいる者はいない。

こういう情報を気にするのは大抵がエリートばかりだし、そういう者たちは大抵、自分の家から情報を仕入れる。

不確実性の高い広報紙よりはそちらの方が、安心確実だからだ。実はよそ者であるカイルにはそういう仕入れルートが無いため、これは意外にありがたがつたりする。

「記事によつては嘘の並べられたものもあるけど、おおよそ判別ができるからな」

カイルはひらひらと手に持つた紙を振つてから机の上に置く。

「ふーん。でさ、カイル。なにがマズイの？」

その言葉にカイルは耳を疑う。このお氣楽娘はそんなこともわかつていないので？ いや、お氣楽娘だからこそそんなこともわからないのか。

カイルはくつくりとした目で自分を見ている少女に説明をしてやる。「あんな、女王制を敷いているこの国で女王が死んだってことは、次の女王を選ばなきやならないってことだ。そして世襲制である女王の地位にはメクフィリア女王の娘、アイリス王女が就くことになるだろう」

カイルは一旦言葉を切りレーミアにいいか？ と尋ねる。

「アイリス王女はまだ14歳。この国では一応成人年齢ではあるしこう言うのも失礼だが、まだまだ幼い。きちんとした引継ぎなどもできていないので、女王の仕事を務め上げることが出来ると思うか？」

「いえ、思いません」

なぜか丁寧な言葉遣いで返していくレーミア。ちよつとキワドイ内容だったか。

「そういうことだ。未熟な王の治める国なんて恰好の狙い目じゃないか。おそらくガズール帝国あたりなら戦争を仕掛けてきてもおかしくはない。というか実際、戦争は起つるだろ？」

「えーっ！ 戦争になつちやうのー？」

「しーっ！ レーミア！ 声が大きいよ」

声の方を見ると、談話室の扉からロドリスが入ってくるところだつた。

「みんな今はピリピリしてんんだから。戦争とかあんまり大きい声で言わないほうがいいよ」

ロドリスはレーミアの隣に立つてやれやれ顔で言つ。

そう、レーミアが何も知らないだけであつて大抵の人ならこのくらいのことは想像がつくのである。

「まあおそらく傀儡政治の幕開けだらうな。アイリス王女を傀儡として立て、裏で宰相あたりが政治を行つ。これに乗つかつて反乱なんかが起こらなければいいが」

「すごいですねカイトは。そこまで考えているなんて」

「ねー、ロドリスもそう思つよねー。カイトは私が何も知らないだけって言つんだよー！」

「い、いえ……。レーミアはもう少しこの国の状況を理解しておいたほうがいいと思いますよ」

「えー、そんなー。ロドリスまで私をバカ呼ばわりするー」

ぶーぶー、と頬をふくらまして談話室を出て行くレーミア。

「あつ、ちょっと。待つてくださいよー」

それを追つてロドリスもこの場を去つていった。

彼女らは本当に賑やかだな。

この学校に通うようになつて、あの2人からはカイルも少なからず影響を受けているだらう。

人見知り無く誰とでもすぐに仲良くなるレーミア。

そして、頭が良く、入学してから同じ部屋で、この国のこと色々教えてくれたロドリス。

彼らは、友人であると同時に、カイルがこの学園内で信用の置ける、唯一の人物であつた。

まあ今はそんなことはどうでもいい。それよりも、本当にマズいことになつた。

もし、ガズールとの戦争中に内輪揉めをするような事態になれば、

この国は終わりかもしれない。

そしてその隙をガズール帝国が見逃すはずが無い。

「できれば王女だけでも救いたいものだな」

誰もいなくなつた談話室でカイルはひとりつぶやく。

少なくともカイルにそう思わせるくらい、彼は今は亡きメクフイリア女王に感謝していた。

そしてこれからしばらく後。

カイルの予想したとおりに、エウステイア王国は動乱の時代へと突入するのである。

夜が明け、森の中をラプタ商国へ向けてカイル達が歩き始めてからしばらく ちょうど太陽が真上に来た頃、カイルは森に充満する草木の匂いの中に、異質な、しかし最近嗅ぎ慣れた匂いを感じ取る。「ん？ どうしたの、カイル？」

最後尾を歩くカイルが急に立ち止まつたのに気づき、振り向いたレミアが尋ねる。

「血の匂いだ……」

カイルは全員に、小さな声と身振りで止まれと指示をする。匂いは微かだから距離は遠いだろうが、用心したほうがいいと思つてのことだった。

「たしかに薄くだが、感じるな。これは……」

エリがカイルの言葉に同意を示す。

「ロドリス、何が起こっているかわかるか？」

「ちょっと待つて。今聞いてみる」

ロドリスはカイルの言葉に、目を閉じ、森の言葉に耳を傾ける。

「ん？ いつたい何をやつているんだ？」

訝しむエリに、カイルはロドリスの能力を説明する（ちなみにレミアには軍事学校時代に話してある）。

エリはそんな不思議な能力が存在するのかと驚いていたが、今現在のロドリスの様子を見るとおいそれと否定はできないようで、何も言わずに結果を見守つている。

「東の方の開けた場所で、男が大勢に襲われているみたい。それと女の子もいるって」

しばらくして、ロドリスは木々の言葉を伝える。

植物の伝えてくれる情報には制限はある。しかし、異常事態との接触を避けたい時などにはこれほど便利なものはないだろう。そして、森の中では、彼の能力は最大限にその力を發揮する。

「そ、うか、どうするべきかな」

少數対多数の戦闘の場合、何かしらの厄介がつきまとつ。山地の近いこの辺りなら山賊も出るだろつし、思いもよらない深い事情などが絡んでいる場合も多々あるからだ。まあただ単に弱い者いじめといふこともあるが、血を見るほどの事態であるからその線は薄いだろつ。

「野盗の類か？ だとしたら襲われているのは貴族つてところだろうか」

エリの言葉にレー・ミアがはつと氣付いたように手を合わせる。

「もしそうだつたら、ヒウスティア王国まで連れて帰つてもうつりができるかもしれないよ？」

しかし、カイルはそれは違うだろつ、と考えていた。

ここは街道からも遠く離れた森の中だ。一番可能性が高いのは密輸商人だろうか。

「いや、こんな森の中まで貴族が来るなんてことは考えにくい。とりあえず様子を見に行つてくるから、お前達はここで待つて。ヒリ、二人をたのむ」

レー・ミアとロドリスは、剣の腕が立つ方ではない。エリならばこの2人を庇かばいながらでもじゅうぶん戦えるだろつ。

カイルは、頷くエリに後を任せ、「ちょっと、カイルー！」と小声で叫ぶレー・ミアは無視。

音を立てないように、木々をかきわけて、血の匂いを辿つて行く。だいぶ匂いが濃くなつてきた頃、森の中に突然、開けた場所が現れた。

（どれどれ、どんな状況だ？）

気配を殺して木の陰に身を隠しながら様子を窺う。

そこには馬車を背にして必死に戦う男の姿があつた。

傷を負い鎧と顔を血まみれにした彼は、同じ鎧を着た10人程の男たちに囲まれながらも剣を振るつて。いる。

剣を左手に持ち、右腕はもう動かないのか、だらんと垂れ下がつた

ままピクリとも動いていない。

（あれは護衛の騎士か？ でも、いや……あの鎧、どこかで……）  
カイルは男たちの着る鎧に見覚えがあるような気がしていた。

注意深く目を凝らしてみる。

すると鎧の胸の部分に、小さくだがエスティア王家の紋章らしきものを見とめることができた。

（王家の紋入り鎧……近衛騎士か）

やつと思い出した。以前王城に呼ばれた際、あの鎧を着た騎士の姿を見ていたのだ。

（でもなぜ、近衛がこんなところで？ しかも仲間同士で……）  
そうは思っているが、この状況を見るに、カイルには一つの答えしか導き出すことは出来なかつた。

確認を得るため、カイルは目の前の状況を、隅から隅まで観察する。  
馬車には窓が無く、中の様子を見ることはできない。

助けに入るか否か。

もしカイルの考えが当たつているなら、すぐにでも飛び込まなくてはならないだろう。

そして、カイルの考えは正しかつた。

男たちの一人が「王女」という単語を口にしたのである。

カイルは、両手に剣を抜くと、彼らの死角から飛び出した。  
一番近い所にいる男目がけて、右手を横薙ぎにする。

背中からザックリと切られた男は、奇声をあげながら昏倒した。

「なつ、なんだお前はっ！－」

仲間の悲鳴を聞いて、男たちはようやくカイルの乱入に気付いたが、  
その頃にはもう、さらに2人が左右の剣によつて切り伏せられてい  
た。

「遅えよつ！」

彼らの注意はすでにカイルの方へ移っていた。  
さすがに近衛騎士ともなると立ち直りが早かつたが、カイルには関  
係ない。

2つ同時に振り下ろされた刃を、膝を折つて地面すれすれにまで重心を落とすことで避ける。

そして、頭上を刃が難いだ直後、2人の足、膝から下を切り離す。カイルの剣速は、骨をも一瞬で両断するほどものであつた。

痛みに苦悶する獣じみた叫びと共に鮮血が舞う中を、カイルは見る者に恐れを抱かせるような無表情で駆け抜ける。

そして、彼の通る跡には物言わぬ骸がひとつ、またひとつと打ち棄てられていく。

わずかのうちに、カイルの周囲に立つてゐる者はいなくなつていて、「だいじょうぶですか？」

カイルは一人で戦つていた男に向けて言葉をかける。

傷ついた男はもう、おびただしい量の血を流してしまつたようで、顔はすでに青ざめている。

「君は……レストニアの……」

男は意外とはつきりした声で、カイルに問いかける。カイルは自分の正体を知つていて、「どうしてそれを」と驚いたが、続く言葉にその理由を知る。

「私は以前……メクフィリア様の……騎士をやつていた」

「そういうことか」

それならばカイルのことを見ていてもおかしくはない。

「そして今は……」

彼はそう言つて、動かせる左手で馬車を指し示す。

カイルは彼の意思を汲み取り、馬車の扉を開け放つ。

そこには、エウステイア王国現王女、アイリス・ルフェス・エウステイアの姿があつた。

外での争いに巻き込まれないよう馬車に押し込まれていたのであらう。

「アーケス、アーケス。しつかりして！」

扉が開いて、血まみれの騎士の姿を見たとたん、彼女は目に涙を浮かべて男の名を呼ぶ。

「死んじゃいや……死んじゃいやよ……」

「アイリス……さま……。彼に……彼と共に……それ……が……」

「アーツ！　いや、いやよ！　死なないで、お願ひ！」

アイリス王女の叫びもむなしく、アーツと呼ばれる騎士はそれから息を引き取つた。

死の間際、彼は一瞬カイルの方を向き、まるで「彼女を頼む」とでも言うようにカイルを見つめていた。

カイルは騎士に寄り添い、悲しみに泣くアイリス王女の肩に手を置いた。

「アイリス、彼はもう神の元へと旅立つたんだ」

「アーツは……アーツはわたくしを守つて……」

カイルは虚ろな目をして、つぶやき始めたアイリスを強く揺さぶり、強引に視線を合わせる。

「アイリス、アイリスわかるかい？　カイルだよ」

「力……カイル……さま？」

「ああ。以前、よく一緒に遊んだだろう。覚えているよね」

カイルは5年前に軍事学校に入る前、しばらく王城で暮らしていた時期があつた。

その頃に幼いアイリスの遊び相手をしていたのを、今でもよく憶えている。

「は、はい。カイルさま。カイルさま……わたし」

一瞬光の戻った瞳が、また暗く沈んでいくのを見たカイルは、肩を握る手に力を込めて言う。

「アイリス、君は生きなければならぬ。彼が命を賭けてまで守つてくれたのだろう？」

まだ14歳の少女には辛いことかもしれない。しかし、カイルは敢えて彼女に現実を突きつける。

「君は彼の分まで生きなければいけない。それが彼の望みであり、伝えたかったことだらうから」

「はい、はい……アークスの伝えたかったこと……」

そつ言つて彼女は、意識を失つてしまつた。

カイルは慌てて彼女の身体を支える。張り詰めていた緊張がついに限界を迎えたのだろう。

今はそつとしておこう、と判断したカイルは、騎士達の遺体を埋葬するための準備を始める。

別に死者を悼む気持ちをもつてゐるわけでもないが、近衛騎士の死体を野ざらしにしておくのは色々と都合が悪いだろう。

この馬車もなんとかしなきやなと思いながら、馬車の添え木を一つ切り外し、それで穴を掘り始める。

そろそろ、戦闘が終わつたことをロドリスも感知してゐるはずだ。しばらくすればここに来るだろつ。

「しかし、どうするかな」

カイルはこれからのことを考える。

アイリスが起きたら、詳しい話を聞かなければならないが、カイルの想像通りならば、王国に帰るのは危険かもしけない。

カイルたちの旅は、思つた以上に大変なものなりそうだつた。

いつも、ありがとうございます。

戦闘シーンは難しいですね。臨場感がなかなか出せない。たくさん書いてるうちに上手になるのかなあ。あと、この話では人の死ぬシーンがあります。これがまたムズい。

悲しみとか喪失感の表現が上手にできません。

こんな感じの初心者丸出しの拙文ですが、読んで頂いた方にはどうとも感謝。

色々と勉強して面白いと思つてもらえるような文章を書きたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9965z/>

---

剣の王子と亡国の傀儡姫

2011年12月31日16時55分発行